

# ゲーテの靈魂概念 —オルフェウス教の影響を中心に—

## Goethe's Concept of the Soul – with Focus on the Influence of Orphism

文学研究科人文学専攻博士後期課程在学

ツグラッゲン・エヴェリン

Evelyn Zgraggen

### 目次

はじめに

序 章 ゲーテのオルフェウス教についての記述・発言

第 1 章 ゲーテが探求したオルフェウス教などについて

第 2 章 ゲーテの「靈魂の概念 (Seelenbegriff)」

第 1 節 ゲーテの「モノド (Monade)」

第 2 節 ゲーテの「デーモン (Dämon)」と「中核 (Kern)」

第 3 節 ゲーテが見る「デーモン」・「中核」・「モノド」・「エンテレヒー (Entelechie)」・「靈魂 (Seele)」との関係性

第 3 章 「エンテレヒー的モノド (entelechische Monade)」・「太陽 (Sonne)」・「精神 (Geist)」

おわりに

引用文献及び参考文献

### はじめに

ドイツでは 1780 年に輪廻思想について論争が起きた。そのきっかけと見られるのはゴットホルト・エフライム・レッシング (Gotthold Ephraim Lessing, 1729-1781) の著作『人類の教育』(*Erziehung des Menschengeschlechts*, 1780) である。ゲーテ (Johann Wolfgang Goethe, 1749-1832) の義兄弟であるヨハン・ゲオルグ・シュロッサー (Johann Georg Schlosser, 1739-1799) は 1781 年と 1782 年に『輪廻に関する二つの対話』(*Über die Seelenwanderung: Zwei Gespräche* 1781/82) を執筆し、ヘルダー (Johann Gottfried Herder, 1744-1803) はシュロッサーが 1781 年に書いた第 1 対話に対して同じ年に『輪廻に関する三つの対話』(*Über die Seelenwanderung. Drei Gespräche*, 1781) を書いた。ゲーテ自身はこの輪廻に対する論争に直接参加しなかったが、ゲーテは既に若いころから

あらゆる作品を通して輪廻概念を探求し、輪廻について発言している。一生涯に輪廻への確信が変わらず、年を経ると共に様々な表現を使い、自身の生命観と輪廻観を表現しようとしている<sup>1</sup>。ハンス・ヨアヒム・シム（Hans Joachim Simm）は『ゲーテと宗教』（*Goethe und die Religion*）という著作の中で、ゲーテが常に自身の世界観と宗教観についての考察を自身の作品の中で表現しようとしていたと述べている<sup>2</sup>。ゲーテの考察の中に、霊魂不滅と生命の永遠についての記述があるので、本稿ではこの問題について論じる。

グロリア・コロomboは「ゲーテと輪廻」（*Goethe und die Seelenwanderung*, 2013）という随筆の中で、ゲーテの『詩と真実』<sup>3</sup>の第8章の中の引用文に基づいて、ゲーテの輪廻観に影響を与えた作品をいくつか紹介している。それはプロティノスの『エンネアデス』、ポルピュリオスの『妖精の洞窟』、プルタルコス『モラリア』という新プラトン主義の作品、またジョルダノ・ブルーノなどの伝統的でヘルメス主義の作品、そして『ルリアのカバラ』とヒンドゥー教の伝統に基づいたインドの『バガヴァッド・ギーター』である。コロomboはさらにゲーテのいくつかの作品を輪廻の視点から解釈している<sup>4</sup>。

しかし現在、ゲーテの輪廻観についての研究やゲーテ作品の輪廻を基にした解釈はまだ十分にされていない状況があるといえる。ゲーテの輪廻観についての理解を深めるためには、ゲーテの霊魂概念を明らかにする必要がある。なぜなら輪廻は霊魂の輪廻だからである。本稿では、まずオルフェウス教の影響を中心にゲーテの霊魂概念について論じることにはしたい。そして次に、ゲーテ自身の霊魂概念や輪廻概念と関連している重要な用語、すなわち「デーモン（Dämon）」・「モノド（Monade）」・「エンテレヒー（Entelechie）」・「霊魂（Seele）」・「中核（Kern）」・「エンテレヒー的モノド（entelechische Monade）」・「太陽（Sonne）」・「精神（Geist）」について論じていきたい。

本稿では、既に翻訳がある引用文はそのまま引用し、翻訳がない引用文の場合には筆者が訳し、必要に応じてドイツ語の原文も載せた。

## 序章 ゲーテのオルフェウス教についての記述・発言

ゲーテは彼の人生において主として二つの時期にオルフェウス教を探求したが、その第2期の方が集中的で、実りがあった。第1期は1774/75年であり、第2期は「始原の言葉・オルフェウス<sup>5</sup>の教え」（*Urworte Orphisch*, 1820）を執筆した1817年であった。ヘルダーの紹介で、ゲーテは若い時に

<sup>1</sup> 参照 ツグラッゲン・エヴェリン「ゲーテの輪廻概念と霊魂不滅思想（モノド、エンテレヒー）について——資料を中心に」（『創価大学人文論集』第28号、2016年）。

<sup>2</sup> 参照 Simm (2000: 12)

<sup>3</sup> ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 (9)』 「詩と真実」 311 ページ

<sup>4</sup> 参照 Colombo, Gloria (2013): *Goethe und die Seelenwanderung*. In: *Goethe-Jahrbuch 2012*, Bd. 129, S. 39-41.

<sup>5</sup> 筆者は「オルペウス」を「オルフェウス」に書き換えた。

オルフェウス賛歌の影響を受けた<sup>6</sup>。1774年6月8日にゲーテはオルフェウス教の教祖であるオルフェウス（Ὀρφεύς, Orpheus）が出てくるヘルダーの作品『人類最古の記録』（*Aelteste Urkunde des Menschengeschlechts*, 1774）について次のように述べている。

彼（オルフェウス）は彼の感情の深みへと降り、内面からすべての単純な自然の高い神聖な力を起こし、この力を今、うず暗がりの中で、幕電で、あちらこちらで朝やさしく微笑んでいるオルフェウスの歌へと導き、上昇することから広い世界へ導いている。あらかじめ最近の学者たち、神をすてた人々（Detheist）や無神論者、文献学者や原典編纂者や東洋学者という邪悪を火や硫黄や満ち潮で根絶してから。<sup>7</sup>

Er ist in die Tiefen seiner Empfindungen hinabgestiegen, hat drinne all die hohe heilige Krafft der simpeln Natur aufgewühlt und führt sie nun in dämmerndem, wetterleuchtendem hier und da morgendfreundlichlächelndem, Orphischem Gesang von Aufgang herauf über die Weite Welt, nachdem er vorher die Lasterbrut der neuern Geister, De – und Atheisten, Philologen, Textverbesserer, Orientalisten, mit Feuer und Schwefel und Fluthsturm ausgetilget.<sup>8</sup>

さらに1775年4月1日のヘルダー宛の手紙の中でもゲーテは、クリストフ・マイネルスの書籍『最古の民族、特にエジプト人の宗教史についての試み』（*Versuch über die Religionsgeschichte der ältesten Völker, besonders der Aegypter*, 1775）に出てくるオルフェウスの名を取り上げている<sup>9</sup>。『詩と真実』の中でゲーテは古代作品との決定的な出会いについて次のように述べている。

古代のひとびとと学派において私にもっとも気に入ったのは、詩と宗教と哲学が完全に一つにとけあっているということであった。そして私にはヨブ記、ソロモンの雅歌や箴言、およびオルフェウスやヘシオドスの歌は、私のあの最初の意見にたいして適切な証明をあたえてくれるように思えたので、私はいっそう熱心に私の意見を主張した。<sup>10</sup>

当時の古典学におけるギリシャ神話と文学についての議論を通して、ゲーテは1817年に改めて古代ギリシャ神話とオルフェウス教の文学を探求することになった。まずは『ホメーロスとヘシオドスについての手紙、特に神統記について』（*Briefe über Homer und Hesiodus, vorzüglich über die*

<sup>6</sup> 参照 Trevelyan (1981: 62 ff., 113ff.)

<sup>7</sup> In einem Brief an Gottlob Friedrich Ernst Schönborn, in: FA 1, 375-376 筆者訳

<sup>8</sup> In einem Brief an Gottlob Friedrich Ernst Schönborn, in: FA 1, 375-376

<sup>9</sup> 参照 FA 1, 444 & 947

<sup>10</sup> 『ゲーテ全集9』『詩と真実』（潮出版社、2003年）、196ページ

Theogonie, Heidelberg 1818) という作品を読んだが、その中ではゴットフリード・ヘルマン (Gottfried Hermann, 1772-1848) とフリドリッヒ・クロイツェル (Friedrich Creuzer, 1771-1858) が最古のギリシャ神話について意見を交換している。ゲーテは次にフリドリッヒ・ゴットリーブ・ウェルケル (Friedrich Gottlieb Welcker, 1784-1868) によって出版され、解釈されたゲオルグ・ゾエガ (Georg Zoega, 1755-1809) の『論文集』 (Abhandlungen, 1817) を読んだ<sup>11</sup>。この読書によってゲーテは1817年10月8日に5つの詩句からなる「始原の言葉・オルフェウスの教え」を記した。

その後、1820年に「始原の言葉・オルフェウスの教え」が『形態学誌 I 2』 (Zur Morphologie I 2) という冊子の中で出版された。同じ年の5月2日から6月22日までに彼は自己のコメントを付した<sup>12</sup>。「始原の言葉・オルフェウスの教え」が「人間のメタモルフォーゼ (変容) (Metamorphose des Menschen)」として名づけられたこともある<sup>13</sup>。

クロイツェルとヘルマンの手紙を読むことで、ゲーテは「聖なる言葉 (Hieroi Logoi)」を知ることになり、このオルフェウス教文学の言葉をドイツ語で「始原の言葉 (Urworte)」と翻訳した。

また、ゾエガの『論文集』の中にマクロビウス (Macrobius) の『サトゥルナリア』 (Saturnalien) が引用されているが、『サトゥルナリア』の中ではエジプト人の教えが説明されており、この教えによれば人間の誕生の時に四人の神々が援助するのである。それは「ダイモン (ΔΑΙΜΩΝ: デーモン)」、「テュケー (ΤΥΧΗ: 偶然)」、「エロース (ΕΡΩΣ: 愛)」、「アナンケー (ΑΝΑΓΚΗ: 強制)」である。ゲーテはこれに基づいて「始原の言葉」を執筆し、さらに次のドイツ語の表現を書き加えた。

「ダイモン (デーモン)、Daimon (*Dämon, Individualität, Charakter*)」と「テュケー (偶然)、Tyche (*das Zufällige, Zufälliges*)」と「エロース (愛)、Eros (*Liebe, Leidenschaft*)」と「アナンケー (強制)、Ananke (*Nöthigung, Beschränkung, Pflicht*)」である<sup>14</sup>。その上に彼は「エルピス (ΕΛΠΙΣ: 希望)、Elpis (*Hoffnung*)<sup>15</sup>」という言葉を書き加えた。ゾエガが『論文集』の中で補訂をし「抑えがたい大胆に前進しようとする人間の心のことを私たちは別の言葉で希望と呼ぶ」<sup>16</sup>と述べ、これを人間の誕生の時にもう一つの働いている運命の力として捉えた。ゲーテはこのゾエガの補訂に基づき、「エルピス」を書き加えた<sup>17</sup>。

「始原の言葉・オルフェウスの教え」はオルフェウス教の要素だけでなく、様々な神話の要素から組み立てられている<sup>18</sup>。ゆえに「始原の言葉・オルフェウスの教え」はタイトルが示す如く、オルフ

<sup>11</sup> FA 20, 1350-51

<sup>12</sup> 参照 FA 20, 1349-50

<sup>13</sup> 参照 Kloft (2001: 89)

<sup>14</sup> 参照 FA I, 20, 1353 & G-Hb 1, 356

<sup>15</sup> 参照 Wilpert (1998: 1102)

<sup>16</sup> 筆者訳 „dem unbezähmten Erkühen des menschlichen Geistes, das wir mit einem andern Ausdruck Hoffnung nennen“ Zoega (1817: 40)

<sup>17</sup> 参照 G-Hb 1, 362

<sup>18</sup> 参照 Dietze (1977: 11-37)

エウスのだけとはいえないだろう。

## 第1章 ゲーテが探求したオルフェウス教などについて

本章ではゲーテが読んだゾエガの『論文集』、およびヘルマンとクロイツェルの『ホメーロスとヘーシオドスについての手紙、特に神統記について』から、輪廻について述べられた個所を紹介する<sup>19</sup>。『ホメーロスとヘーシオドスについての手紙、特に神統記について』の中には次のような記述がある。

これは古いエジプトの祭司教義にある輪廻の形容である。このような教義が播種祭と密議のギリシャの祭司長によって倫理的に健全なものとして認められ、信条として受け止められたあと、いつの時にもかりそめにされなかったのみならず、常に本質的な内容に従い、常に絵（古代ギリシャの瓶が示すように）や教えや習慣や歌の中に生かされた。<sup>20</sup>

So sind dies Modificationen von einem alten Aegyptischen Priesterdogma der Seelenwanderung. Nachdem dieses Dogma von den Griechischen Vorstehern der Saatfeste und Mysterien für sittlich heilsam erkannt und als Glaubensartikel aufgenommen worden war, so ward es auch zu keiner Zeit vernachlässigt, sondern immer und immer seinem wesentlichen Gehalt nach in Bildern (wie die altgriechischen Vasen zeigen) in Lehren, Gebräuchen und Liedern lebendig erhalten.<sup>21</sup>

この引用文では、「輪廻」はギリシャ人によって引き受けられたもともとエジプトの祭司教義であったと紹介されている。最近の研究、すなわちヘルムート・オブスト（Helmut Obst）の『輪廻』（*Reinkarnation*, 2009<sup>22</sup>）という作品によれば、輪廻の思想がどのようにしてギリシャ人社会に入り込んだかという問いはなかなか解決することができない、という。オブストによるとエジプト社会において輪廻の教えが存在したかどうかは排除することもできないし、証明することもできない。そうではあるが、ギリシャ人の中で輪廻の概念が始めて現れたのはオルフェウス教の人々の場合であった。

オルフェウス教は密儀的な救済宗教であり、紀元前に6世紀にトラキアからギリシャおよび南イタリアで広がった。この宗教の教祖はギリシャ神話の詩人と預言者であるオルフェウスである。人間の霊魂は神的で不死のものとして見られ、生々流転している。このような霊魂は常に人間になったり、動物になったりしなければならない。霊魂を生々流転から解放することはオルフェウス教の目標であ

<sup>19</sup> 参照 FA I, 20, 1351-52

<sup>20</sup> Hermann und Creuzer (1818: 108) 筆者訳

<sup>21</sup> Hermann und Creuzer (1818: 108)

<sup>22</sup> Obst (2009: 41ff.)

る<sup>23</sup>。ゾエガの『論文集』においては、人間の輪廻と動物の輪廻について次のように論じられている。

ポルピュリオスはレオンティカ祭に神聖にされた人々はあらゆる動物の像に囲まれたので、一般的に黄道の動物への暗示として捉えたが、彼によると輪廻における人間の靈魂の運命を意味していたと述べている。この最終の説明（ポルピュリオス）は疑いなく新プラトン主義的で、昔の魔術師にとって未知の発想であった<sup>24</sup>。

Porphyrus erzählt, dass wer in die Leontica eingeweiht wurde, sich mit mancherlei Thierfiguren umgab, was man insgemein für Anspielung auf die Thiere der Ekliptik hielt, was aber nach ihm die Schicksale der menschlichen Seele in den Seelenwanderungen bedeutete. Diese letzte Erklärung ist ohne Zweifel ein neuplatonischer, den alten Magiern unbekannter Einfall.<sup>25</sup>

ゲーテは既に新プラトン主義派のポルピュリオス（Porphyrius, 234-304）の哲学を探究していた。ゲーテは1806年にポルピュリオスの『妖精の洞窟』をワイマールの図書館から数ヶ月借りている<sup>26</sup>。ゾエガはポルピュリオスを通して「輪廻における人間の靈魂の運命」に言及している。ポルピュリオスの輪廻観は新プラトン主義的であり、昔の魔術師がまだ知らなかったことである。

オブストによれば、オルフェウス教の場合は人間の靈魂は常に人間あるいは動物として生まれ変わらなければならない。他方ポルピュリオスは、人間と動物の靈魂を区別し、人間の靈魂が動物に化身することを否定している<sup>27</sup>。

ゾエガの『論文集』とヘルマンとクロイツェルの『ホメーロスとヘーシオドスについての手紙、特に神統記について』の論述が、ゲーテの靈魂概念と輪廻概念とどのように関係していることについてさらに詳しく調べる必要がある。

次章では、ゲーテの靈魂概念と関係している他の用語について論じる。

## 第2章 ゲーテの「靈魂の概念」

本章では、ゲーテの輪廻観を深く理解するために、彼が使用している「デーモン」・「中核」・「モ

---

<sup>23</sup> 参照 Obst (2009: 41ff.)

<sup>24</sup> Zoega (1817: 137-38) 筆者訳

<sup>25</sup> Zoega (1817: 137-38)

<sup>26</sup> von Keundel (1931: Nr. 454)

<sup>27</sup> 参照 Obst (2009: 41ff.)

ナド」・「エンテレヒー (Entelechie)」・「霊魂 (Seele)」という用語がどのように関係しているかということについて論じる。

## 第1節 ゲーテの「モノド」

ゲーテは1768/69年に重い病気にかかった時に様々な本を読む中、フリドリッヒ・クリストフ・エティンゲルス(Friedrich Christoph Oetingers, 1702-1783)の著作も読んで、ライプニッツのモノド論に注目している<sup>28</sup>。

ゲーテは霊魂不滅<sup>29</sup>と輪廻概念<sup>30</sup>を描写するために「モノド」というライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716) の用語も使用している。1813年1月25日にヴィーラントの葬儀の日、ゲーテがファルクとの対話の中で「霊魂 (Seele)」と「モノド (Monade)」という概念を以下のように定義している。

私は全生物の最終的な根源構成要素の種々な階級や序列を仮定している。この根源構成要素は、いってしまえば自然における全現象の出発点であって、この要素からすべてのものの霊化がはじまるので、これを私は霊魂 (*Seelen*) <sup>31</sup>とよびたい。あるいはむしろモノド<sup>32</sup> (モナーデ) (*Monaden*) <sup>33</sup>ともよぶことができよう——私たちはこのライプニッツの用語を手放さないようにしよう。<sup>34</sup>

同じ対話の中でゲーテは「私は、あなたが私をここにみているように、千度もここにいたことがあるにちがいないし、またこれからあと千度もここに帰ってきたいと望んでいる」<sup>35</sup>と述べ、これは間断なき生々流転を意味している。この箇所ではゲーテは自身の数え切れない先在と、死後の存続を認めている。ゲーテにとっては「蟻のモノド、蟻の霊魂と同様、世界のモノド、世界の霊魂」<sup>36</sup>が存在している。人間の霊魂が動物に入り込むことはゲーテは明確に述べていないが、ファルクとの対話の中でゲーテはヴィーラントの霊魂が将来に「世界のモノド (Weltmonade) <sup>37</sup>」あるいは「星 (Stern) <sup>38</sup>」として自分と出会えることについて論じている。したがってゲーテにとって、「霊魂」・

<sup>28</sup> 参照 Hilgers (2002: 205)

<sup>29</sup> 参照 Hilgers (2002: 205)

<sup>30</sup> Im Gespräch mit Falk über die Seelenwanderung (FA II, 7, 169 ff.)

<sup>31</sup> FA II, 7, 171

<sup>32</sup> 筆者はこの対話で使われる「モナーデ」という言葉を「モノド」に書き換えた。

<sup>33</sup> FA II, 7, 171

<sup>34</sup> ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録 2』 207 ページ

<sup>35</sup> ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録 2』 211 ページ

<sup>36</sup> ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録 2』 207 ページ

<sup>37</sup> FA II, 7, 175

<sup>38</sup> FA II, 7, 175

「モナド」は同じであっても、その生まれ変わる形状は様々なのである。

## 第2節 ゲーテの「デーモン」と「中核」

ゲーテの輪廻概念を明らかにするために本節では「デーモン (Dämon)」の概念を解明する。ゲーテの霊魂概念は彼の「デーモン概念 (Dämon-Begriff)」とも比較することができる。ゲーテは『詩と真実』の中で「魔神的なもの (Dämonische) <sup>39)</sup>」について次のように述べている。

あの魔神的なものは、あらゆる有形無形なものの中に現われうるばかりでなく、動物においてもきわめて顕著に表明されるものではあるが、とくに人間とはもっとも驚くべき関連をもち、道徳的世界秩序にたいして、それと対立するものではないにしても、それを縦に貫く一つの力を形成する。<sup>40)</sup>

このような「魔神的なもの (Dämonische)」は人間にも動物にも体现することができる。「魔神的なもの (Dämonische)」は「デーモン (Dämon)」から由来している言葉であり、同じものを指している。ゲーテ自身が「始原の言葉・オルフェウスの教え」の中で「デーモン (Dämon)」と題する下記の第1句において行ったコメントの中でも輪廻概念が表れている。

お前がこの世に生を授けられたその日に、  
太陽が遊星たちの挨拶を受けて立つと、  
お前はすぐさま不断の成長をとげた、  
出産時の法則に従って。  
それがお前の運命 (さだめ) であり、お前は自己から逃れることはできないのだ。  
すでに巫女や預言者もそう告げていた。  
そして、時代 (とき) も権力 (ちから) も生きて発展する  
刻印された形相を壊すことはできない。<sup>41)</sup>

Wie an dem Tag der Dich der Welt verliehen

Die Sonne stand zum Gruße der Planeten,

<sup>39)</sup> FA 14, 841

<sup>40)</sup> ゲーテ (2003) 『ゲーテ全集 10』「詩と真実」314 ページ

<sup>41)</sup> ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 13』67 ページ



Bist alsobald und fort und fort gediehen  
Nach dem Gesetz wonach Du angetreten.  
So mußst Du seyn, Dir kannst Du nicht entfliehen,  
So sagten schon Sybillen, so Propheten,  
Und keine Zeit und keine Macht zerstückelt  
Geprägte Form die lebend sich entwickelt.<sup>42</sup>

第1句のゲーテ自身のコメントの中で「したがって、第1節は個性の不変性を繰り返しかえし確言しているのである。個は、たとえこのように決定されたにしても、ひとつの有限なものとして、たしかに破壊されることはありうるが、しかしその中核が厳として存在しているかぎり、幾世代を経ても粉碎されたり、寸断されたりすることはないのである<sup>43</sup>」と述べている。筆者は、ゲーテがここで用いる「中核 (Kern)」という表現を「デーモン (Dämon)」と同じものと見なしたい。個性の中核が幾世代を経て存在し、発展し続けている「時代(とき)も権力(ちから)も」壊すことはできない。

「始原の言葉・オルフェウスの教え」の中で、「デーモン」とは「出生時にすぐ明確な形をとって現れる、人格の必然的な限定された個性<sup>44</sup>」であるとされている。そして「ここからいまや、人間の将来の運命も出てくるものとされた」<sup>45</sup>。この意味では人間の個性こそが人間を類まれな人間にする。このように人間の出生の時に将来の発展のための必要な種が持たせられる。言い換えれば、人間はこのような種を前世から持っていて、成長しながら思い出し、個性を発展させ続けるのである。「デーモン」は、個人的な宿命と内面的建設計画 (innerer Bauplan) である「神靈的なもの (Daimonion)」と類似している<sup>46</sup>。

ゾエガの『論文集』で引用されたように、マクロビウスは、デーモンを太陽と精神の創始者と暖かさと同視している<sup>47</sup>。ゲーテが使用している「中核」という言葉は、デーモンとも類比することができるし、靈魂とも例えることができる。

### 第3節 ゲーテが理解する「デーモン」・「中核」・「モナド」・「エンテレヒー」・「靈魂」と相互の関係性

「エンテレヒー」はもともとアリストテレスの概念であり、存在しているものに内在している能力と可能性を実現することを意味し、またゲーテはライプニッツが靈魂をモナドで描写するように、エ

<sup>42</sup> FA 20, 492

<sup>43</sup> ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 13』 68 ページ

<sup>44</sup> ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 13』 67 ページ

<sup>45</sup> ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 13』 67-68 ページ

<sup>46</sup> 参照 Kloft (2001: 89)

<sup>47</sup> 参照 Zoega (1817: 39-40)

ンテレヒーを用いるようになる<sup>48</sup>。クラウディア・ヒルゲルス（Klaudia Hilgers）は『エンテレヒー・モナド・メタモルフォーゼ（変身）』（*Entelechie, Monade und Metamorphose*）という本の中でゲーテの「デーモン」が「モナド」の構造の原理と照応していると述べている。

また、デーモンは感応の原理のようにすべての個人の完成の目指しへ操縦している。その点においてデーモンの概念はエンテレヒーの概念と関連している。<sup>49</sup>

Darüber hinaus steuert der Dämon im Sinne eines Wirkungsprinzips das auf Vervollkommnung hin orientierte Streben eines jeden Individuums. In dieser Hinsicht steht der Dämon-Begriff dem der Entelechie nahe.<sup>50</sup>

ゲーテのデーモン概念は、彼のモナド概念とも、彼のエンテレヒー概念とも関連している。またアングス・ニコルス（Angus Nicholls）は、『ゲーテのデーモン的なものの概念』（*Goethe's Concept of the Daemonic*, 2006）の中で、「始原の言葉・オルフェウスの教え」に書いてある「法則に従って」と「生きて発展する刻印された形相」というゲーテの表現では、ギリシャ・ローマの占星術の中にあるような神の予定に関連しているわけではなく、現世的アリストテレスのエンテレヒーとライブニッツのモナドに関連しているのであると述べている<sup>51</sup>。

さらにゲーテは1830年3月3日に行われたエッカーマンとの対話の中でモナドとエンテレヒーの概念について次のように述べている。

個性が決して譲歩しないこと、また人間が自分にふさわしくないものををはねつけることが（省略）そのようなものの存在している証拠になると思う。」（省略）「ライブニッツは（省略）こうした自立的な個性について同じような考えをもっていた。もともと、われわれがエンテレヒーという言葉であらわしているものを、彼は单子（モナド）と名付けたがね。<sup>52</sup>

第2章をまとめると、ゲーテは「デーモン」と「モナド」と「中核」と「エンテレヒー」という用語を用いて、自分なりに自身の靈魂概念さらに靈魂不滅の思想と輪廻概念を表現しているといえる。ゲーテはこれらの用語で、同じものを自分なりに叙述するために類似的に使用している。

例えば、1818年7月16日のスルピッツ・ボワッセレー（Sulpiz Boisserée, 1783-1854）宛の手紙

<sup>48</sup> 参照 FA II, 12, 1231

<sup>49</sup> Hilgers (2002: 199) 筆者訳

<sup>50</sup> Hilgers (2002: 199)

<sup>51</sup> 参照 Nicholls (2006: 241-242).

<sup>52</sup> エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話（中）』174-175 ページ

の中でゲーテは「私のオルフィカ（meine Orphika）<sup>53</sup>」と呼ぶが、これはボワッセレーに送った自分の詩「始原の言葉・オルフェウスの教え」のことを意味している<sup>54</sup>。ゲーテはオルフェウス教の思想を自分なりに解釈し、新しく作り直したともいえる。

### 第3章 「エンテレヒ一的モナド」・「太陽」・「精神」

1824年5月2日にゲーテとエッカーマンが沈んでいる太陽をみながら、生死観について話している。ゲーテは「古代人の言葉<sup>55</sup>」である「沈みゆけど、日輪はつねにかわらじ<sup>56</sup>」を引用してから次のように述べている。

「75歳にもなると」と彼は、たいへん朗かにかたりつづけた、「ときには、死について考えてみないわけにいかない。死を考えても、私は泰然自若としていられる。なぜなら、われわれの精神（Geist <sup>57</sup>）は、絶対に滅びることのない存在であり、永遠から永遠にむかってたえず活動していくものとかたく確信しているからだ。それは、太陽と似ており、太陽も、地上にいるわれわれの目には、沈んでいくように見えても、実は、けっして沈むことなく、いつも輝きつづけているのだからね。」<sup>58</sup>

この箇所でゲーテは霊魂不滅と輪廻を比喩的に叙述している。太陽は人間の霊魂と例えられている。ゲーテはここで「精神（Geist）<sup>59</sup>」という言葉を使用しているが、「霊魂（Seele）」と同じ意味で使っている。この比喩では、太陽が人間の霊魂である。それ相当に日の入りが死であり、日の出が霊魂の生まれ変わりあるいは肉体化である。太陽は沈んで見えなくなっても存在し続けている。すなわちゲーテは「地上にいるわれわれの目」には見えないが人間の霊魂が死後にも存在し続けているということを主張している。次の人生の朝に霊魂が生まれ変わり、新しく肉体化しているが、それは同じ太陽が昇るように、同じ霊魂が生まれ変わるということである。このように、エッカーマンと対話したとき、ゲーテは日の入りを見ながら、太陽を人間の霊魂と例えた。さらにゲーテのデーモン概念との類似性を見ることができる。さきにも述べたように、ゾエガの『論文集』の中でマクロビウスの『サトルナリア』が引用され、デーモンが太陽と同一視されている<sup>60</sup>。

ゲーテは1827年3月19日付ツェルター宛の手紙の中で「エンテレヒ一的モナド」という自分で作

<sup>53</sup> FA II, 8, 214

<sup>54</sup> FA II, 8, 592-93

<sup>55</sup> 参照 FA 12, 115

<sup>56</sup> エッカーマン（2001）『ゲーテとの対話（上）』145ページ

<sup>57</sup> FA 12, 115

<sup>58</sup> エッカーマン（2001）『ゲーテとの対話（上）』145ページ

<sup>59</sup> FA 12, 115

<sup>60</sup> 参照 Zoega (1817: 39-40)

った複合語を用いて、靈魂不滅と転生について次のように述べている。

先立つか後になるかはわかりませんが、世界靈に召されて上天に戻るまでは、活動を続けようではありませんか。その時がくれば、永遠に生きる神は、私たちがすでに自己の真価を示した活動に類する新しい活動を私たちに拒みはしないでしょう。もし父なる神がそのとき、私たちが地上ですでに欲し、かつなしとげた正と善の追憶と余薫とを付与したまうならば、私たちはいよいよ迅速に世界機構の歯車にかみあうことになるに相違ありません。

エンテレヒエ的（完成にむかって努力する）<sup>61</sup>モナドは、休まない活動によってのみ自己を維持しなければなりません。この活動が第二の天性となるならば、エンテレヒエ的<sup>62</sup>モナドは永遠に仕事に欠けることはありません。こんなわかりにくい言い方をしましたが悪しからず。しかし、理性では及ばず、しかも不条理を認めまいとすれば、人は昔からこうした領域にまぎれこんで、こうした言い方で考えを伝えようとしたものです。<sup>63</sup>

「上天に戻る（in den Äther zurückkehren）<sup>64</sup>」ということでゲーテは死のことを叙述し、来世の新しい「活動（Tätigkeit）<sup>65</sup>」の可能性を希望している。さらに「追憶（Erinnerung）<sup>66</sup>」という表現はゲーテが若い頃に研究していたプラトンの「アナムネーシス（ἀνάμνησις: 想起）」の概念<sup>67</sup>と関連させることができる。したがってゲーテは来世にも前世のことを思い出せると考えている。

同じ手紙の中でゲーテは「エンテレヒエ的モナド」などの「こんなわかりにくい言い方<sup>68</sup>」をしたことを謝っている。ゲーテは靈魂不滅と輪廻についての自分の考え方を他の人に伝えるために様々な表現を使用している。彼は言葉に表しがたいものを表現できるように常に努力している。さらに1829年9月1日にゲーテはエッカーマンとの対話の中で靈魂不滅と輪廻について次のように述べている。

私は、われわれの永生については、疑いをさしはさまない。自然は、エンテレヒエなくして活動できないからね。しかし、だからといって、われわれ誰もかれもが同じように不死というわけではないのだ。未来の自分が偉大なエンテレヒエとしてあらわれるためには、現在もまた偉大な（große<sup>69</sup>）エンテレヒエでなければならない<sup>70</sup>。

<sup>61</sup> 筆者が「完成にむかって努力する」を「エンテレヒエ的」に書き換えた。

<sup>62</sup> 筆者が「エンテレヒエ的」を書き加えた。

<sup>63</sup> ゲーテ（1981）『ゲーテ全集 15』231-232 ページ

<sup>64</sup> FA II, 10, 454-55

<sup>65</sup> FA II, 10, 454-55

<sup>66</sup> FA II, 10, 454-55

<sup>67</sup> 参照 FA I, 737

<sup>68</sup> ゲーテ（1981）『ゲーテ全集 15』232 ページ

<sup>69</sup> große は和訳されていなかったのので、筆者は「偉大な」という言葉を書き加えた（FA II, 12, 361）。

<sup>70</sup> エッカーマン（2001）『ゲーテとの対話（中）』137 ページ

言い換えれば、ゲーテは霊魂が常に生まれ変わっていると思っているので、来世に偉大なエンテレヒーとして生まれ変わるために、既に今世に偉大なエンテレヒーでもなければならぬと考えている。このエンテレヒーは霊魂と同一視することができる。

ゲーテは死の時の「霊魂」・「魂」・「精神」の偉大さによって、来世も偉大な「霊魂」・「魂」・「精神」として生まれ変わることができると確信している。したがって、死後もエンテレヒーの偉大さは変わらず、来世に同じ偉大さであられる。すなわち、生きている間にこそ「霊魂」の成長のために努力すべきである。

## おわりに

本稿ではゲーテの人生と作品における霊魂不滅（あるいは生命の永遠）について論じた。ゲーテの輪廻観とゲーテの作品の輪廻を基にした解釈についての研究はまだ十分にされてない状況がある。そこで、ゲーテの輪廻概念を深く理解するために、ゲーテの霊魂概念を明らかにした。

ゲーテの霊魂概念についてオルフェウス教の影響を中心に論じた結果、彼が自身の霊魂概念と輪廻観を叙述するためにいくつかの哲学的用語と言葉を用いていることがわかった。すなわち「デーモン (Dämon)」・「モノド (Monade)」・「エンテレヒー (Entelechie)」・「霊魂 (Seele)」・「中核 (Kern)」・「エンテレヒー的モノド (entelechische Monade)」・「太陽 (Sonne)」・「精神 (Geist)」である。

霊魂はゲーテにとって「エンテレヒー的モノド」であり、すなわち常に完成にむかって努力しているものである。そして今世の努力によって人間の霊魂が偉大な霊魂に成長することができ、来世同じような偉大な霊魂として生まれ変わることができる。「常に完成にむかって努力する」—これはある意味でゲーテの哲学の核心ともいうべきものである。

ゲーテの霊魂概念と輪廻概念は緊密に関連し、彼の生命観と生命の永遠についての思想を理解するために不可欠なものだといえる。今後の研究課題としてはゲーテの作品を彼の霊魂概念と輪廻観を基に、さらに詳しく解釈する必要がある。

## 引用文献及び参考文献

(ドイツ語・英語文献)

Colombo, Gloria (2013): Goethe und die Seelenwanderung. In: *Goethe-Jahrbuch* 2012, Bd. 129, Wallstein Verlag, Göttingen, 2013, S. 39-47.

Dietze, Walter: *Urworte, nicht sonderlich orphisch*. — In: *Goethe-Jahrbuch*. Bd. 94. Weimar 1977.

*Goethe Sämtliche Werke. Von Frankfurt nach Weimar*. Hrsg. von Wilhelm Große. Bd. 1, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997. (Zitiertitel: FA 1)

*Goethe Sämtliche Werke. Das erste Weimarer Jahrzehnt*. Hrsg. von Hartmund Reinhardt. Bd. 2. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1997. (Zitiertitel: FA II, 2)

- Goethe Sämtliche Werke. Napoleonische Zeit.* Hrsg. von Rose Unterberger. Bd. 7. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1994. (Zitiertitel: FA II, 7)
- Goethe Sämtliche Werke. Zwischen Weimar und Jena.* Hrsg. von Dorothea Schäfer-Weiss. Bd. 8. Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1999. (Zitiertitel: FA II, 8)
- FA II, 10,
- Goethe Sämtliche Werke. Johann Peter Eckermann Gespräche mit Goethe.* Hrsg. v. Christoph Michel, Bd. 12, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1999. (Zitiertitel: FA 12)
- Goethe Sämtliche Werke. Dichtung und Wahrheit.* Hrsg. von Dieter Borchmeyer et al. Bd. 14, Deutscher Klassiker Verlag, Frankfurt am Main, 1986. (Zitiertitel: FA I, 14)
- Goethe, Johann Wolfgang: *Ästhetische Schriften 1816-1820. Über Kunst und Altertum I-II.* In: Sämtliche Werke. Bd. 20. Frankfurt am Main (Deutscher Klassiker Verlag) 1999. (Zitiertitel: FA 20)
- Hermann, Gottfried und Creuzer, Friedrich: *Briefe über Homer und Hesiodus, vorzüglich über die Theogonie.* August Oswalds Universitätsbuchhandlung, Heidelberg, 1818.
- Hilgers, Klaudia: *Entelechie, Monade und Metamorphose: Formen der Vervollkommenung im Werk Goethes,* Wilhelm Fink Verlag, München, 2002.
- Kloft, Hans: *Metamorphose und Morphologie. Ovids Verwandlungen und Goethes Naturanschauung.* In: Abhandlungen der Braunschweigischen Wissenschaftlichen Gesellschaft. Bd. 64, J. Cramer Verlag, Braunschweig, S. 77-97.
- Nicholls, Angus: *Goethe's Concept of the Daemonic. After the Ancients.* Camden House, New York, 2006.
- Obst, Helmut: *Reinkarnation. Weltgeschichte einer Idee.* Verlag C.H. Beck, München, 2009.
- Simm, Hans-Joachim: *Goethe und die Religion.* Insel Verlag, Frankfurt am Main, 2000.
- Thorwart, Wolfgang: *Heinrich von Kleists Kritik der gesellschaftlichen Ordnungsprinzipien. Zu H. v. Kleists Leben und Werk unter besonderer Berücksichtigung der theologisch-rationalistischen Jugendschriften,* Königshausen & Neumann, Würzburg, 2004.
- Trevelyan, Humphrey: *Goethe and the Greeks,* Cambridge (Cambridge University Press) 1981.
- von Keundel, Elise: *Goethe als Benutzer der Weimarer Bibliothek.* Weimar 1931, Nr. 454.
- von Wilpert, Gero, *Urworte. Orphisch,* in: Goethe-Lexikon, Kröner-Verlag, Stuttgart, 1998.
- Zoega, Georg: *Ab handlungen.* Hrsg. von Friedrich Gottlieb Welcker. Dieterichschen Buchhandlung, Göttingen, 1817.

(日本語文献)

- ビーダーマン編 (1963) 『ゲーテ対話録 2』 菊池栄一訳 白水社
- エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (上)』 山下肇訳 岩波書店
- エッカーマン (2001) 『ゲーテとの対話 (中)』 山下肇訳 岩波書店
- ゲーテ (2003) 『ゲーテ全集 9』 「詩と真実」 山崎章甫・河原忠彦訳 潮出版社
- ゲーテ (2003) 『ゲーテ全集 10』 「詩と真実」 河原忠彦・山崎章甫訳 潮出版社
- ゲーテ (1980) 『ゲーテ全集 13』 小岸昭訳 潮出版社
- ゲーテ (1981) 『ゲーテ全集 15』 「書簡」 小栗 浩訳 潮出版社
- ツグラッゲン・エヴェリン「ゲーテの輪廻概念と霊魂不滅思想 (モナド、エンテレヒー) について——資料を中心に」 (『創価大学人文論集』第28号、2016年)